

日米の原爆認識
——「沈黙」の視点からの一考察——

手塚千鶴子

An Analysis of the Japan-U.S.
Perception Gap Regarding the Atomic
Bombing from the Perspective of
Silence and Silencing

TEZUKA Chizuko

This study attempts to examine the Japan-U.S. perception gap regarding the atomic bombing highlighted in the Enola Gay controversy, by exploring influences of meanings of silence and silencing on remembering and discussing the bombing in the two countries. It first describes the American perception as the victors' story and the Japanese one as the victims' story. Then the study claims that a major Japanese silence in terms of not expressing anger against the bombing coupled with not addressing the bombing responsibility to America in the overall framework of compliance to censorship indicates their desire to evade the war responsibility and aggression while the extensive Government information control and manipulation for preventing and suppressing criticism against the bombing have prevented Americans from listening to victims' stories. In so doing, cultural factors underlying or contributing to silences are discussed. It concludes that both countries have ended up being equally unbalanced and less comprehensive in their respective perceptions.

キーワード: 原爆の認識、エノラ・ゲイ展論争、戦争の記憶、検閲、被爆者

はじめに

1995年5月、ワシントンの航空宇宙博物館では、前年からの国内論争の

末、被爆の展示をふくむ展示案が大幅カットにされ、広島への原爆搭載機エノラ・ゲイの胴体のみが、乗員達のビデオ証言や写真とともに展示された。この展示案への批判の先鋒を担ったのは空軍協会をはじめ退役軍人の面々である。彼らの激しい反対は議会、メディア、国民を巻き込む大論争に発展し、米国内の論争とはいえ、日米の原爆認識の溝の深さを浮き彫りにし、日本人にも、強烈な印象を残した。

彼らは無事に生き抜き50年目を迎えたが、その幸運に浴さなかった日本の死者達は、遺品や写真を通して語りかける貴重なチャンスを奪われて沈黙を余儀なくさせられ、原爆をめぐる日米のコミュニケーションの好機が失われたといえる。

ひるがえって日本の原爆をめぐる認識や議論を想起すると、そこには今日にいたるまで自主的な沈黙、沈黙の強制など多様な沈黙が存在した。人が過去の歴史を語り記憶し記念する時には、同時に、沈黙や忘却が作用すると言われる(Hein & Seldan, 1997)。もう一つの当事国米国の沈黙は、投下以前にすでに始まっていた。

本稿ではこの原爆認識のギャップを明らかにし、そのギャップがどうして生じたかを探る一つの鍵として、両国の対人関係やコミュニケーションにかかわる文化的要因にもふれながら、さまざまな沈黙とそれがもたらした意味を分析し、今後の日米の原爆をめぐる本格的な対話づくりの一步としたい。

1. エノラ・ゲイ展論争と米国の原爆認識

1) エノラ・ゲイ展論争

スミソニアン協会傘下の国立航空宇宙博物館は、1984年、エノラ・ゲイの復元作業を開始し、その展示を、第二次大戦終結50周年の記念にあわせ、原爆は戦争を早期に終わらせて100万の米国人の命を救ったという原爆神話を見直し、多様な観点から原爆投下の理由や意味を考える企画にしたいと準備をすすめた。1991年に資料収集を開始し、1994年1月には企画書第一版「分岐路—第二次大戦の終わりと原爆、冷戦の起原」¹⁾が完成。これは「1. 結末への戦い」、「2. 原爆投下の決定」、「3. 原爆の投下」、日本の

被害を伝える「4. グラウンド・ゼロ」、原爆は「核の時代」と冷戦の始まりでもあったとする「5. 広島、長崎の遺産」の5部からなる。企画書が関係者に配付されるや、批判が一気に爆発、退役軍人をはじめ国民をまきこみ、新聞、ラジオ、テレビでの議論が活発化、博物館は激しい非難をあげた。主要なマスコミはおおかた批判に同調する傾向を見せ、上院は、同年9月、「スミソニアン糾弾」の決議²⁾を満場一致で採択。「エノラ・ゲイは戦争を慈悲深く終わらせ」日米の多数の命を救う役割をはたしたと主張した。

批判の争点は、太平洋戦争をアメリカにとり(真珠湾への)「復讐の戦争」、日本にとり独自の文化を守る「防衛の戦争」と企画書が性格づけた点にはじまる。そのほか、ダワー(1987)ら歴史家の間ではすでに当り前とされていた、戦争における人種偏見の指摘、無条件降伏へのこだわりが降伏を遅らせた可能性、ソ連への牽制というもう一つの原爆投下の理由への言及や、本当に上陸作戦が必要となったか否かの問いかけ等、歴史解釈をめぐるものから、米兵の被害より原爆被害の写真が多すぎる、感情にうったえる日本側の遺品や写真が多いなど、展示バランスに関するものまで多岐にわたった(齊藤1995)。しかし、あまりにも日本を被害者に、米国を加害者に描こうとしたというのが一番の非難の的となった。

この間、博物館側は、空軍協会や在郷軍人会など、関係者との驚く程粘り強い議論と交渉を継続し、あくまでも妥協点を求めて企画書の修正を重ねたが(ハーウイト1997)、1995年1月スミソニアン協会のマイケル・ヘイマン事務局長は、第二次大戦終結50周年にあたり「歴史的分析」と「記念」を結びつけるという基本的間違いを犯したとして、実質上の中止を発表したのである(ハーウイト1997)。

2) 米国の原爆認識とその象徴

ここで明らかになった米国の原爆認識は、「勝利者の物語」であるという(Dower, 1996)。原爆は本土上陸作戦を行っていたら失われたであろう多数の米国人、さらには日本人の命を救い、早期に戦争を終わらせたという米国の原爆神話は揺らがなかった。投下直後から、反対意見が少数とはいえ存在しており、現在でも、投下に対する米国の謝罪を求める意見をふく

め、多様な原爆認識が米国内にはあるが、大きな力を維持しているのはこの「勝利者の物語」である。

事実、1945年10月27日、ロス・アンジェルスでは原爆投下再現ショウが10万の観衆を迎えて行われ、さらに1976年には同様のショウが各地を巡ったのであり、1946年のビキニ核実験終了祝賀パーティでは、キノコ雲の形をしたエンジェル・ケーキが出されたという(Boyer, 1994)。また1994年、米国郵政公社は、「原爆は戦争を早期に終わらせた」という文言つきのキノコ雲を配した記念切手を計画したが、日本政府等の批判を受けて中止した。もとよりエノラ・ゲイの復元には退役軍人らの熱い悲願がこめられ、100万ドルの巨費と4万時間以上が費やされ、現在も数年後の永久展示を待っているのである。

これらのエピソードは、地上はるか3万フィートから原爆を投下した米国では、原爆はなんら恥じることのない輝かしく誇らしい勝利のイメージとしてとらえられ、その原爆認識には地上での惨禍やそれを受けた者への共感が欠落していることを示している。

また、捕虜虐待や南京、シンガポール、マニラでの虐殺など、日本軍の残虐な行動に怒り、上陸作戦に恐怖していた多くの軍人達には、原爆のお蔭で「命拾いした」という素朴だが切実な思いがついてまわり、その認識が広く国民に浸透していたことも、今回の論争で明らかになった(斉藤1995)。

2. 日本人の原爆認識とその象徴・記念碑

こうした原爆認識のバランスの悪さは、内容こそ違おうが、日本の広島、長崎の記念碑、慰霊碑などにもみられる。被爆時の惨状をとどめた『原爆ドーム』や浦上教会の遺構に加えて、傷ついたこどもを抱えて雄々しく進む『嵐のなかの母子像』、平和のラッパを吹く子を抱く母の『平和祈念像』などの、多数の母子像、さらに、『原爆の子の像』『平和を祈る子(像)』『平和の像(若葉)』『戦災復興記念(碑)』など、こどもの像が圧倒的に多い³⁾。長崎の平和公園の力強い『平和記念像』は、成人男性像として稀なケースである。

ここには、こどもや母たちに象徴される、罪がないのに犠牲になったという被害者の視点、さらに、悲惨さを乗り越え平和を祈り復興に励んできたけなげな日本の自己イメージがある。

日本の原爆認識の大勢は悲劇の物語であり、原爆は「残酷で強力な敵にもたらされた敗北と、その後の禁欲的忍耐のシンボル」である (Dower, 1996)。リチー (1999) も、原爆が虐殺ではなく悲劇として日本人に受けとられたことに注目する。原爆は非人道的で許せない悪と認識され、憎しみの対象となるが、不思議にも投下国への憎しみはない。『原爆の子』をはじめ、こどもや女性教師を主役にした多くのヒバクシャ・シネマには、悪いことをしていないのに、ある日突然自然災害のように原爆がふってきたという認識と、それを不平も言わず静かにうけとめる姿勢が反映しているという。

ワシントンで、圧倒的な力と勝利を象徴する男性的なエノラ・ゲイの勇姿が展示された年、長崎ではもう一つの母子像が『被爆 50 周年記念事業碑』⁴⁾として建立された。それは、原爆の悲惨さと、死者達の冥福を祈り、永久平和を願うものだが、「あたたかく母の胸に眠る傷心の子供」は「あの日の日本の姿」、「母の姿は日本を支える世界の国々の姿」だという。ここでも、傷ついた自己イメージが姿を見せ、国家による攻撃性の発露である戦争に参加した男達の姿も、戦争の検証にとりくむ自立した大人の姿も見えない。

3. 戦争の記憶と語り：日本と米国

戦争の検証に至る前の、ただ単にそれを語るということすら日本では困難であるようだ。Cook 夫妻 (1992) は 1980 年代に多くの日本人にインタビューし、その戦争の記憶の核は、(1) ある日戦争は突然やってきた、(2) 日本が負けてしまった愚かな戦争だが、敗戦は同時に解放をもたらしたというものであり、さらに (3) 米国人が記憶する日本への強い憎悪に比べて日本には米国への憎しみが薄いと指摘している。また日本人には、戦争の意味を広い文脈で問う姿勢が乏しく、その語りは個人的体験に終始しがちだという。特に印象深いのは、戦後 40 年を経ている、多くの人に

としては、このインタビューが戦争を語る初めての経験だったということだという。ここにすでに原爆をめぐる沈黙の芽がある。

Cook 夫妻は、個人のレベルを越えて戦争を積極的、公的に記録し、展示し、語る博物館の多い米国に比べ、日本にはそのような場がないことを指摘し、複雑な日本の戦争体験を公の場できちんと議論し、相対化する必要を主張している。

日本人の戦争に対する鮮烈な思いを凝縮すると、「だまされた」「戦争はもうこりごり」という言葉になるという (Dower, 1999)。このような認識のもとでは、戦争と向き合うには当然困難がつきまとう。

一方、米国人の戦争の記憶は、許しがたいパール・ハーバーへの急襲で戦争にひきずりだされ、原爆による勝利とともに終結したというものである。戦争から40年近くたって米国人をインタビューした Sterkel (1984) のベスト・セラー『良き戦争』によれば、戦争はファシズムを倒し、自由と民主主義を守った「正義の戦争」「良き戦争」であった。その戦争はまた、アメリカを不況から脱出させ、戦後の好景気と世界のリーダーの地位をもたらした、二重の意味で「良き戦争」であった。したがって、ある者は、この戦争を「面白かった」、「えらくすばらしい時だった」と記憶し、「1945年、アメリカ合衆国は地球を相続した」とさえ語るのである。

この「良き戦争」の記憶と強く一体化している退役軍人達には、原爆投下の意味を問い直す展示の企画自体が、彼らの記憶を汚し、彼ら自身の存在を否定しかねないものと感じられたとしても無理はない。その怒りが抗議を生んだのである。

4. 原爆をめぐる日本の多様な沈黙

1) 被爆者達の沈黙

展示企画にたいする米国の退役軍人達の攻撃的かつ活発な議論とは対照的に、被爆者達は長い沈黙を続けてきた。1970年代後半、80年代と、原爆体験の風化が叫ばれる頃になると、重い口を開いて語り部として語り始めた者、体験記などを書く者、1972年のNHKの求めに応じて原爆体験を絵にする者も多く出てきたが、戦後50年を通じて、ブラウ(1995)によれ

ば、「広島、長崎についてのある種の沈黙は、過去にも現在にも存在する」という。

彼らの沈黙の理由には、生きるのに必死で、語ったり書いたりするゆとりがなかったこと、原爆のつらい体験を思い出したくないという人間的な願い、就職や、結婚などでの差別と偏見から身を守るため被爆者であることを隠したい思いがあるのだという。自分だけが生き残ったうしろめたさや罪悪感もあるにちがいない。

しかし、この沈黙の背景には、また「寡黙さや慎重さといった日本では広く受け入れられている行動規範」があるとブラウは主張する。西洋では「知識や公開すること、さらには情報といったものは絶対的な善だと考える傾向がある。逆に沈黙は、全くの悪とは言えないまでも、疑わしい、良くないものだと考えられている」のに比べ、「包み隠さずさらけ出すことは、日本的なことではない」(ブラウ 1995、99 頁)。

2) 占領軍による検閲と沈黙による応答

被爆者達の沈黙を生じさせたもう一つの大きな原因は検閲である。占領軍は 1945 年 9 月 19 日にプレス・コードを発令し、1949 年 10 月末まで検閲を続けたが、それにより、被爆者が自らの体験を語ることから、原爆に関する科学的、医学的情報もふくむ一切の情報の公開までもが禁じられた。それは新聞、雑誌、書籍、ラジオ、映画、手紙に至る広範囲なものであった⁵⁾。

無論、被爆作家達のなかには、彼らの声を封じようとする検閲に対し、被爆体験を語る肉体的、心理的苦痛にくわえ、処罰の恐怖にも抗して本や歌集を出した大田洋子、栗原貞子、正田篠枝、原民喜らもいた(堀場 1995)。

しかし、この外からの沈黙の強制に対し、これを受容し、抗議しないばかりか、自己検閲までしたという、自らの沈黙があったのも事実である。堀場(1995)は、被爆者の治療に不可欠な医学研究成果でさえ、医師達がなぜ敢然と出版を求め、論文を次々に検閲局に提出しなかったのかと慨嘆している。松浦(1999)は、「過酷な報道統制がしかれるところにはかならず非合法文書がうまれる。しかし占領下の日本では、右翼から左翼にいたる

まで、非合法文書や深夜叢書はついに発行されなかった」(379頁)という。日本の新聞は「実務的な面からいえば」検閲をそれほど不自由と感じなかったという意見も、新聞社社長から出されている⁶⁾。また、本や雑誌の編集者、さらに作家自身が、事前検閲に出す前に原稿を自己検閲する傾向があったのも確かである(堀場 1995、ルービン 1995)。

この沈黙は占領下という政治社会状況のなかとはいえ、権威にあらがわず応じる傾向、不当な仕打ちにさえ抗議をよしとしない、日本の文化的風土の影響があったことも認めざるをえない。平和の時代のものとはいえ、米国の退役軍人達の抗議行動とは対照的である。

3) 怒りや恨みの不表出としての沈黙

エノラ・ゲイ展をめぐる論争中、退役軍人達の怒りが実にストレートに堂々と表明されたことは、当時の新聞、雑誌への投書、投稿記事、ラジオやテレビ番組での発言、国立航空宇宙博物館との手紙や議論のやりとりに明白である(ハーウイット 1997)。しかし、長い戦後の期間被爆者達が怒りをあらわにすることはあまりなかった。彼らの沈黙で印象的なのは、その体験記や報告、語りに、原爆を投下した米国や米国人への怒りがでてこないことである。

妻を原爆で失った小倉(1948)の『絶後の記録』には、そのような怒りはまったく表現されていない。後年その復刻版(1982)のあとがきで、検閲による修正なしで初版が出たのは、原爆投下をなんら非難攻撃しなかったからだと言っている。自身もかなりの重症を負った医師の蜂谷(1955)も、日本の独立後に出版された『ヒロシマ日記』では、批判や怒りを口にしない。むしろ彼の病院を訪れた米軍軍医達とのあたたかな交流さえ記している。原爆の惨状を淡々と受容する彼の仏教的あきらめともいえる述懐に対し、ある将校は、「私はそんな気持ちになれない、私だったら国を訴える」という。しかし、その将校には当たり前と感じられた訴えるということが、蜂谷にはわからないのである。

この日本人の怒りの表出の少なさを裏付ける、1946年の日本での米国戦略爆撃調査団による大規模調査がある。それによると、広島、長崎では

日米の原爆認識

19%、日本全体でもわずか12%の被調査者のみが、原爆投下に対し米国に憎しみを感じたという(Asada, 1997)。また戦後20年間の書籍、新聞、雑誌の原爆論関連の論調は、おおむね原爆の悲惨さを訴えるものが多く、「被爆の傷痕、後障害を凝視するのに精一杯で、極めて『内向き』」であり、「原爆を落とした米国への恨みはほとんどない」という(岩垂・中島1999、542頁)。

検閲を行う際の顕著な理由になったのは、米国や占領軍に対する怨恨をかきたてるということであったという(ブラウ1995)。したがって、検閲の強制的な枠組みのもとで、ネガティブな感情が押さえられたのも確かである。しかし、占領が終わったあとも依然、同じ対応に終始していった背景には、日本人が対人関係の和を維持することを優先させ、怒りの表現を抑制しがちな感情表示規則(マツモト・工藤1996)が働いているからではないか。戦後の「一億総懺悔」の国民的意識が、原爆を落としたものへの怒りを薄めていた可能性もあるにはあるが(岩垂1999)。

4) 原爆慰霊碑碑文論争に見る沈黙

かくして、恨みや怒りは、1952年に除幕された原爆慰霊碑「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」においては、まさに乗り越えるべき対象となった。碑文の発案者浜井は、これを「世界の平和は、一個人、一国家、一民族だけの力では達成できない。—中略—恨みや憎しみを捨てて、寛容な気持ちで手を差し伸べていくのが、平和をのぞむものの基本的態度でなくてはならない」と解釈している(石田1997、154頁)。しかし、この碑文では「原爆投下責任や日本の戦争責任が人類の『過ち』という言葉に解消されている。わずか原爆投下後7年後において、過去を許し合うことが可能であったか。この理想の高さと、人びとの中に残るわだかまりとの差が、いわゆる碑文論争を生んだのではないか」(石田1997、157頁)という。

事実、同年11月、米国が原爆を投下したのに被害者の日本人が謝るのはおかしいとのパル判事の批判をきっかけに、碑文批判が強まり、投下責任の追求の動きや、戦争責任を日本人だけが負うのは卑屈であるとの意見が

出てきた。

さらに、1957年頃の碑文論争の第三期には、とうに独立を達成して原爆への憎しみが吹き出し、犠牲者に「過ち」があるととれる碑文は堪え難い、いや、恨みに終わらず全世界が過ちを繰り返さぬよう誓うのだなど、賛否両論が渦巻く。しかし最終的には、広島市が1983年に設置した説明板にあるように、碑文は「全人類が戦争を反省し、繰り返さないと誓う言葉として確立したのである」(石田1997、169頁)。

かくして、原爆への恨みとセットになった投下責任の追求か、恨みを越え平和を目指すか、の二つの志向がぶつかりあい、結局は後者の方向が選び取られて、否定的感情は沈黙する。

5) 碑文にみる恨みの沈黙が意味するもの

この沈黙には、日本文化の怒りを抑制する感情表示規則とともに、それに連動する Lebra (1987) のいう日本人の対立回避型の葛藤対処の傾向が働いていると思われる。怒りや恨みを明らかにし原爆投下責任を追求することは、まさに占領国米国との葛藤に直面することを意味するのであり、無意識にそれを回避すべく投下責任追求から降りたといえないか。

日米の大学生の対人葛藤を比較調査した Ohbuchi & Takahashi (1994) は、日本人は、葛藤対処の直接双方向的な戦略、つまり葛藤を明らかにしこちらの欲求を伝え相手のことも考えつつ、言葉でわたりあいながら解決する方法の使用が、米国人に比べ圧倒的に少なかったと報告している。同様に日本人は、葛藤を抱えたまま何もしない「我慢」の戦略を、より頻繁にとる傾向があったという。

戦後をふりかえり、恨みを越えようとの明るい未来志向、平和志向は確かに、過去を水に流し日本が復興に励む実に大きな原動力になったことは間違いない。それはしかし、石田(1997)の指摘するように、投下責任ばかりか日本の戦争責任も問わず、曖昧にする否定的な力を持っていた。あなたの投下責任を追求しないのだから、こちらの戦争責任も加害も問わないで欲しい、お互いさまではないかという甘い期待が潜んでいる。まさに自らの加害や戦争責任の問題との直面、自国の歴史の闇との対決を避け、そ

の問題について長い沈黙を生み出したといえる。

松本(1995)は、すでに1971年、「ただ単に被害者の側からだけではなくて、同時に加害者でもある、加害者にして被害者という、そういう錯綜した立場にまず自らをはっきりと位置づけること」が重要と考えた。しかし、このような認識が日本できちんと芽生えるのは、1980年代の後半からであるという(岩垂・中島)。

加害や戦争責任をめぐる沈黙の結果としての原爆認識の片寄りは、歴史の展示に反映されている。広島平和記念資料館は、原爆投下にいたる歴史的な文脈を欠く一方的被害の展示だとの批判を受け、1994年に東館をオープンした。新たな「軍都広島」のコーナーは、近代日本史のなかで戦争に積極的に加担してきた事実を示し、また「原爆投下の理由」のコーナーも設置されたが、全体として戦争責任や加害に踏み込んだ展示にはなっていない。長崎の原爆資料館は、1996年に追加した日本の加害展示をめぐる、猛烈な批判を浴び、現在の展示「日中戦争から太平洋戦争」のコーナーは、同館での海外の放射線被害や核兵器、核の時代の展示コーナーに比べてスペースもせまく簡略な記述にとどまっている⁷⁾。

この広島、長崎の沈黙は、実は戦争を語るべき日本の国レベルの博物館においても、「戦争の非展示」(千野1997)として広がっている。戦争資料センター的役割もふくめさまざまに議論された「平和祈念館」構想は、厚生省主導のコンセプトのもとに昭和館としてオープンしたが、アジアでの戦争の被害、日本の加害、戦争責任は無論、日本の被害さえ語らず、「戦中・戦後の国民生活上の労苦」が母や子を中心に展示されている⁸⁾。戦争を多角的、総合的に検証する姿勢はない。さらに佐倉の国立歴史民俗博物館⁹⁾には戦争の展示が一つも無い。

5. 原爆をめぐる米国の沈黙

1) 原爆認識形成のプロセスにおける沈黙

日本での原爆をめぐる検閲の大きな目的は、原爆使用は非人道的という米国への非難を抑えるためといわれる(ブラウ1988)が、米国でも開発段階から始まって戦後も、情報の隠蔽、管理、操作が行われていた(リフトン・

ミッチェル 1995)。国民からの批判の可能性を政府やその関係者が十分認識していた証拠である。

原爆開発計画をめぐる徹底した隠蔽という第一の沈黙は、投下後も原爆に関する写真や情報の厳重な管理と非公開という形で継続した。空中撮影の物理的被害のみの写真はよいが、人的被害を示すものは一切国民の目に触れさせなかった。日本で占領軍は、米国人を含む外国人記者の自由な広島、長崎への取材を禁じた。その前に広島入りし惨状を伝えたバーチエット記者の記事は、1945年9月5日に世界に配信されたが、彼の報じた放射線被害は、米国科学者らにより言下にその存在を否定され、彼はマッカーサーに追放されたという。米国の国民も当初から原爆被害の情報を知り得なかったのである。

第二の沈黙は、提供される情報は徹底的に編集され、管理されるという形で貫徹された。投下についての8月6日のトルーマンの公式発表をふくめ、その数時間後に戦争省が配付した原爆に関する公式発表資料は、ウィリアム・ローレンスという専属の科学ジャーナリストが周到に草案を練り、関係者間での慎重な検討の末、作成されたものである。当時の新聞は多くがこの公式発表資料を全文掲載したという。

第三の沈黙は、情報操作としての、原爆への批判を封じ込めるための沈黙である。宗教家、科学者、軍人らの間に投下直後からあった批判が、1945年末頃より高まるきざしを見せた時に、それを意図的にかわそうとした情報操作である。

原爆開発計画にも関わったハーヴァード大学学長コナントは、批判の高まりを懸念し、これをかわすには「権威をもって語れる人に事実を書かせることがきわめて重要だ」と判断し、元陸軍長官スティムソンにその役割を依頼する。コナントがめざしたのは、原爆擁護論ととれる論文ではなく「事実の単なる詳述」であったという。論文では投下決定の根拠はアメリカ人の命を救うことだとし、執筆には後の国務次官補マクジョージ・バンディも加わり、関係者間での慎重な議論と推敲の末、「原爆投下の決定」がスティムソンの名でハーパーズ誌1947年2月号に掲載された。論文では、日本の和平への取り組みの曖昧さ、降伏をひきだすために大きなショック

を必要としたこと、上陸作戦敢行の際には100万の米軍死傷者がでるといわれた(実際はこの数字を裏付けるデータはない)ことなどをあげた。しかし、原爆投下にソ連牽制の意味があったこと、無条件降伏に固執すべきでないとの元駐日大使グルーの進言が十分取りあげられなかった事実など、不都合な事実はあえて触れられていない。この論文掲載を期に、高まりかけた原爆への批判は一挙に沈黙し、原爆神話が定着することとなったという(リフトン・ミッチェル 1995)。

このような主として政府サイドによる隠蔽、情報管理、情報操作という形の沈黙が米国にはあった。しかしそれは、原爆投下を喜ぶ声が圧倒的に強かった投下直後より、少数ながら、投下に批判の声があがっていた事実を逆照射している。それを沈黙させる方法も、放射線被害の否定会見や権威あるハーパーズ誌への論文掲載にみられるように、語るにせよ書くにせよ、言葉を縦横に駆使してなされたことが興味深い。これは、外から禁じられての沈黙にせよ、自ら語らず、問いたださない沈黙にせよ、日本の沈黙のありかたとは反対である。自己表現と議論に本質的価値を置く米国の文化では、議論を通しての相手の封じ込めという沈黙が際立っている。

この米国の沈黙は、原爆投下は戦争を早期に終結させ、正当であったという、被害の視点を全く欠き、複雑な要因を一切廃除した単純な認識にアメリカを閉じ込めてきたといえる。

2) 再びエノラ・ゲイ展論争：そこでの沈黙と語り

このように見てくると、エノラ・ゲイ展の当初の企画は、戦後まもなく沈黙させられた視点、とりわけ被害者の視点に発言のチャンスを与え、より複雑で総合的な原爆認識の形成を意図したものとも理解できる。それが、「良き戦争」と「命の恩人」としての原爆の記憶に一体化している退役軍人を中心にした活発な語りにより、ふたたび沈黙を余儀なくさせられたといえよう。

投下当初からの政府や関係者による周到な沈黙作戦の組織だった徹底ぶりは、リフトン・ミッチェル(1995)に詳しいが、その50年後の退役軍人達の抗議活動も、それに劣らぬ広範で強力なロビー活動、新聞への投書、

国立航空宇宙博物館への手紙作戦の展開であった。

6. 日米の原爆認識のギャップと共通構造

さて、日米両国の原爆認識の相違と展開、そこに作用した沈黙のありかたと意味を分析してきたが、この相違とは裏腹に、そこには共通の構造が浮かびあがってくる。

原爆認識のギャップとは、すなわち同じ原爆を、投下した国、された国が、それぞれの体験にとらわれた視点に閉じこもり、そこを越え原爆投下の全体像とその意味とを、相対化しつつ過不足なくバランスのとれた文脈に位置づけられないことを意味している。

それは自己と他者の輻湊した相互作用のなかで展開する人間の行動、歴史事象について、他者の視点を排除した認識の構造であるが、同時に自己を厳しく見据える視点の欠落、あるいは他者の行為を理由に自分の行為を正当化する態度を示している。「降ってわいた」戦争での「悲惨な」原爆という日本の認識の影では、自ら開始し参加したはずの戦争の責任や、加害の視点が葬られ、米国の認識では、「良き戦争」における「命の恩人」を投下した3万フィートの上空に視点にとどまり、すばらしいキノコ雲におおわれた地上ゼロ・メートルの惨状を見ることができない。自国の歴史としっかり向き合うことは日米の今なお大きな課題である。

おわりに

「宇宙に存在する基本的な力を利用して」作られた原爆¹⁰⁾を投下した側、された側の両方は、ともに、その事実、意味について、この人類未曾有の発明をもたらした英知に匹敵する明晰さ、深さ、厚み、広がりをもった議論を展開する責務を負っている。だが、まだ、互いにその要請には応えていない。

最後に日本での多様な沈黙が示唆してきたものを噛みしめながら、日本人としてどんなことができるのかの手掛かりを考えてみたい。エノラ・ゲイ展の実質上の中止により、被害の視点が発言の機会を奪われたと述べたが、実はこのような企画を自ら行おうとする考えや意欲は日本人には残念

日米の原爆認識

ならなかった。日本での強制された沈黙、自主的な沈黙がもたらした手痛い負の遺産の最大のものは、日本人自身が腰をすえて他者をまじえ真剣に原爆投下をめぐる議論をせずにきたことである。では、21世紀にも、自己、他者双方に対してこの沈黙を続けるのか。

日本人が対決を恐れて沈黙し、避けてきた他者との対話が、実は究極的には、自らの、自国の歴史に正面から向きあう契機となるエピソードを最後に記し、この問いへの答えをみつきたい。

東京のひらがなタイムズという月刊誌は、1995年原爆をテーマの多国籍朗読劇『トンボが消えた日』を、在日外国人によびかけ中、韓、米を含む7カ国からの参加者を得、日本人を加え上演することになる。台本づくりには出演者の本国での戦争体験を家族に問い合わせたり、被爆者の話しを聞くなどの準備をし、多様な視点をもりこもうとした。被爆者達の思いを、日本に苦しめられた国の人も含めて朗読するという大胆な試みである。実際出来上がった台本のなかの「あの爆弾はすばらしい爆弾だった」というセリフは大激論を呼ぶ。「被爆者の気持ちを逆なでする」と憤慨する日本人がいる一方、そのセリフこそ日本人にわかってほしいアジアの人々の偽らざる気持ちで、絶対に直さないでと迫る中国人がいた。彼らはさらに日本の加害のセリフも入れるべきだと主張した。他方原爆の悲惨がテーマの劇で、「すばらしい爆弾だった」なんてとうていよめませんと抗議したのは、植民地主義時代の制圧に悔しさを禁じ得ない、その意味で二重に傷ついた若い韓国人留学生であった。日本人脚本家は、本音の議論を重ねるよりしかなないと覚悟し、出演者、スタッフ、顧問格の被爆者達ととことん議論しこの難関をのりきった。「素晴らしかった」という表現は、原爆が良かったと思う多くのアジアの人がいることを伝えるセリフに変更され、舞台には日本軍の侵略のスライドを加えることにしたのである。劇は無事上演され、参加者全員にそれぞれ深い思いを残したという¹¹⁾。

異なる歴史の記憶と認識を持つ者達が、自分の正直な声をきちんと主張しあい、相手の声も切り捨てず、互いの視点をぎりぎりまで統合しようとした、粘り強いコミュニケーションが成功したのである。むろん単純な被害の視点を超えた広がりや深さを増した舞台は、観客のころころにもしっか

り届いたに違いない。

注

- 1) 企画書第一版の原題は The Crossroads: the end of World War II, the atomic bomb and the origins of the cold war. Nobile, P. (1995). *The Judgment at the Smithsonian: the bombing of Hiroshima and Nagasaki* に原文所収。
- 2) 正式にはこの決議はアメリカ議会 103 会期の上院決議 257 として 1997 年 9 月 23 日に採択された。英文全文は Dower, J. (1996). Three narratives of our humanity. In E. T. Linenthal & T. Engelhardt (Eds.), *History wars: the Enola Gay and other battles for the American past* (pp. 63-96). New York: Henry Holt and Company. の注 10 (p. 260) に掲載。
- 3) 水田九八二郎(1993)『ヒロシマ・ナガサキへの旅——原爆の碑と遺跡が語る』中央公論社を参考にした。
- 4) 引用は碑の解説板による。原文をピース・ウィング長崎より入手。碑の制作者は、長崎県の彫刻家で文化勲章受賞者である富永直樹氏である。
- 5) 検閲関係については、引用参考文献中の坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編(1999)『日本原爆論体系(一) なぜ日本に原爆は投下されたか』日本図書センターに多数ふくまれる。また、江藤淳(1994)『閉ざされ言語空間——占領軍の検閲と戦後空間』文芸春秋社を参照した。
- 6) 朝日新聞 1995 年 3 月 11 日付「GHQ、原爆報道禁じる——『民主化』名目に新たな統制」
- 7) 長崎原爆資料館での展示については長崎市の『長崎原爆資料館ガイドブック』平成 12 年 1 月が詳しく写真入りで解説している。
- 8) 『戦中・戦後のくらし昭和館館内見学案内』は「今からおよそ 60 年ほど前に大きな戦争が起り、昭和 20 年(1945) 8 月 15 日に終わりました」という言葉で始まる。
- 9) 国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)の小冊子『国立歴史民俗博物館』(1998 年 6 月)によれば、この館は 5 つの展示室にわかれ、「日本文化のあけぼの」からはじまり、「王朝文化」、「都市の繁栄」、「村里の民」、「文明開化」、「産業と開拓」という具合に「原始、古代から近代に至るまでの歴史と日本人の民族世界をテーマ」に展示している。しかし太平洋戦争は無論のこと、戦争については一切展示されていない。
- 10) トルーマン大統領声明(1945 年 8 月 6 日ホワイト・ハウス新聞発表)の日本語は、坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編(1999)『日本原爆論体系(一) なぜ日本に原爆は投下されたか』日本図書センターの 2-6 頁に所収。
- 11) 中村哲也(1996)『国籍を越えた若者たち』株式会社ヤック企画にこの時の詳

日米の原爆認識

しいドキュメントがのっている。

引用参考文献

- 石田 (1997) 「過ちはくりかえしませぬから——碑文論争の歩み」坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編 (1999) 『日本原爆論体系(七) 歴史認識としての原爆』(148-174 頁)日本図書センター。
- 岩垂弘 (1975) 「報道にみる原爆と原発」坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編 (1999) 『日本原爆論体系(一) なぜ日本に原爆は投下されたか』(403-415 頁)日本図書センター。
- 岩垂弘・中島竜美による巻末解説 (1999) 坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編 (1999) 『日本原爆論体系(七) 歴史認識としての原爆』(541-543 頁)日本図書センター。
- 小倉豊文(1946) 『絶後の記録——広島原子爆弾の手記』中央社。
- 小倉豊文(1982) 『絶後の記録——広島原子爆弾の手記』中央公論社。
- 斉藤道雄 (1995) 『原爆神話の 50 年——すれ違う日本とアメリカ』中央公論社。
- 坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編 (1999) 『日本原爆論体系(一) なぜ日本に原爆は投下されたか』日本図書センター。
- 坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編 (1999) 『日本原爆論体系(二) 被爆者の戦後史』日本図書センター。
- 坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編 (1999) 『日本原爆論体系(七) 被爆者の戦後史』日本図書センター。
- ダワー、J. (猿谷要 監修、斉藤元一 訳) (1987) 『人種偏見——太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』TBS ブリタニカ。
- 千野香織 (2000) 「戦争と植民地の展示——ミュージアムの中の「日本」」栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉 編『越境する知(一) 身体: よみがえる』(109-143 頁)東京大学出版会。
- トデスキーニ、M. M. (1999) 「『死と乙女』——文化的ヒロインとしての女性被爆者、そして原爆の記憶の政治学」プロデリック、M. 編(柴崎昭則・和波雅子 訳) 『ヒバクシャ・シネマ——日本映画における広島・長崎と核のイメージ』(199-222 頁)現代書館。
- ハーウイト、M. (山岡清二 監訳、渡会和子・原純夫 訳) (1997) 『拒絶された原爆展——歴史のなかの「エノラ・ゲイ」』みすず書房。
- 蜂谷道彦 (1955) 『ヒロシマ日記』朝日新聞社。
- ブラウ、M. (立花誠逸 訳) (1988) 『検閲 1945-1949』時事通信社。
- ブラウ、M. (1995) 「被爆者達の自発的な沈黙」トデスキーニ、M. M. 編(土屋由香 他 訳) 『核時代に生きる私たち——広島・長崎から 50 年』(79-100 頁)時事

- 通信社。
- 堀場清子(1995)『原爆 表現と検閲——日本人はどう対応したか』朝日新聞社。
- 松浦総三(1974)「原爆、空襲報道への統制」坂本義和・庄野尚美 監修 岩垂弘・中島竜美 編(1999)『日本原爆論体系(一) なぜ日本に原爆は投下されたか』(369-393頁)日本図書センター。
- マツモト、D.・工藤力(1996)『日本人の感情世界——ミステリアスな文化の謎を解く』誠心書房。
- 松本寛(1995)『ヒロシマという思想——「死なないために」ではなく「生きるために」』朝日新聞社。
- リフトン、R. J. (梶井迪夫 監修、湯浅信之・越智道雄・松田誠思 訳)(1986)『死のうちの生命——ヒロシマの生存者』朝日新聞社。
- リフトン、R. J.・ミッチェル、G. (大塚隆 訳)(1995)『アメリカの中のヒロシマ(上)』岩波書店。
- リチー、D. (1999)「『もののおわれ』映画のなかのヒロシマ」ブロードリック、M. 編(柴崎昭則・和波雅子 訳)『ヒバクシャ・シネマ——日本映画における広島・長崎と核のイメージ』(28-47頁)現代書館。
- ルーヴィン、J. (1995)「『平和の武器』としての原爆」トデスクーニ、M. M. 編(土屋由香 他 訳)『核時代に生きる私たち——広島・長崎から50年』(101-130頁)時事通信社。
- Asada, S. (1977). The mushroom cloud and national psyches: Japanese and American perceptions of the atomic bombing decision, 1945-1995. In L. Hein & M. Seldon (Eds.), *Living with the bomb: American and Japanese cultural conflicts in the nuclear age* (pp. 173-201). New York & London: M. E. Sharp.
- Boyer, P. (1994). *Bomb's early light: American thought and culture at the dawn of the atomic age*.
- Broderick, M. (Ed.). (1996). *Hibakusha cinema: Hiroshima, Nagasaki and the nuclear image in Japanese film*. London & New York: Kegan Paul International.
- Cook, H. T., & Cook, T. F. (1992). *Japan at war: An oral history*. New York: The New Press.
- Dower, J. (1996). Three narratives of our humanity. In E. T. Linenthal & T. Engelhardt (Eds.), *History wars: The Enola Gay and other battles for the American past* (pp. 963-969). New York: Henry Holt and Company.
- Dower, J. (1996). *Japan in war and peace*. Fontana Press.
- Dower, J. (1997). Triumphant and tragic narratives of the war in Asia. In L. Hein & M. Seldon (Eds.), *Living with the bomb: American and Japanese cultural conflicts in the nuclear age* (pp. 37-51). New York & London: M. E. Sharp.
- Dower, J. (1999). *Embracing defeat: Japan in the wake of World War II*. New

日米の原爆認識

- York: W. W. Norton.
- Hein, L., & Seldon, M. (1997). Commemoration and silence: Fifty years of remembering the bomb in America and Japan. In L. Hein & M. Seldon (Eds.), *Living with the bomb: American and Japanese cultural conflicts in the nuclear age* (pp. 3–34). New York & London: M. E. Sharp.
- Ohbuchi, K., & Takahashi, Y. (1994). Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, convertness, and effectiveness of strategies. *Journal of Applied Social Psychology*, 24, 1345–1366.
- Sterkel, T. (1984). *“The good war”: An oral history of World War II*. New York: The New Press.
- Takayama, H. (Ed.). (2000). *Hiroshima in memoriam and today: As testament of peace for the world* (Rev. ed.). Ashville: Bilmore Press.
- Yoneyama, L. (1999). *Hiroshima traces: Time, space, and the dialectics of memory*. Berkeley: University of California Press.